慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自動車工場におけるQWL-その現状と展望-
Sub Title	
Author	川村晋平(Kawamura, Shimpei) 石田英夫
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1985
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1985年度経営学 第402号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001985-0402

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 0402

学生氏名　川村晋平

主査　石田英夫
副査　奥村昭博
　　高木晴夫

所属ゼミナール　石田英夫研

自動車工場におけるQWL
—その現状と展望—

"労働の人間化"ないしは"QWL（労働生活の質）"と呼ばれる実験が近年、欧米諸国の産業界で進行している。それは、生産現場において様々な形で現われ始めている労働疎外現象を解消し、生産活働の正常は進行を回復することにある。いわばこうしたプロジェクトは、労働における人間性の回復によって企業の経済性をも同時追求しようというものなのである。

一方、現在までのところ日本の産業界において労働疎外現象は顕在化していない。むしろ高品質，高生産性にむけて労使一丸となり取り組んでいるという指摘がなされるくらいである。そして、その原因の1つとして日本の経営の特殊性、いわゆる"日本的経営論"が盛んに議論されるに到った。

なぜ、日本においては労働疎外現象が顕在化しないのか。それは日本の経営が、"労働の人間化"ないしは"QWL"が追求する作業現場における革新やその他の条件を達成してきたからではないか。

本論文は、事例研究を通じてこうした疑問に応えるものである。さらには、その現状分析から今後の課題を展望する。

なお、事例研究の対象としてはトヨタ自動車株式会社を取り上げている。